

## 2サムエル記10-12章 「ダビデの栄えと罪」

### 1A 真実への裏切り 10

1B アモンの侮辱 1-5

2B アラムからの援軍 6-14

3B アラムの屈服 15-19

### 2A 罪の増幅 11

1B 欲望 1-5

2B 隠蔽の試み 6-13

3B 隠れた殺人 14-25

4B 結婚による解決 26-27

### 3A 罪の暴露 12

1B 自分自身を裁く者 1-6

2B 御言葉の蔑み 7-14

3B 喪に服すダビデ 15-25

4B アモンの屈服 26-31

## 本文

### 1A 真実への裏切り 10

サムエル記第二 10 章を開いてください。10 章は 8 章からの続きになります。イスラエルの周辺  
の国々を平定する話しが 8 章にありました。ペリシテ人はダビデに屈服し貢物を収め、モアブも従  
属しました。そして、ユーフラテス川流域からツォバの王が、シリアと連合で戦いを挑みましたが、  
ことごとく破れました。ハマテの王は友好のしるしとして贈り物をダビデに持ってきました。南では  
エドム人を倒して、そこに守備隊を置きました。こうしてイスラエルが、周辺国からの脅威を受ける  
ことがなくなり、周辺国の頭となっていたのです。そして 10 章 1 節です。

### 1B アモンの侮辱 1-5

10:1 この後、アモン人の王が死に、その子ハヌンが代わって王となった。10:2a ダビデは、「ナハ  
シュの子ハヌンに真実を尽くそう。彼の父が私に真実を尽くしてくれたように。」と考えた。

アモンは、ヨルダン川の東にある国です。ロトが生んだ子がモアブとアモンであり、アモンの首都  
ラバは、今のヨルダンの首都アンマンであります。死んだアモン人の王ナハシュは、かつてイスラ  
エルと戦った宿敵です(1サムエル 11 章)。サウルが王の任命を受けて、彼が畑仕事をしている時  
に、ヤベシュ・ギルアデの人たちを奴隷にしようしました。そこで主の御霊がサウルに臨み、彼は  
イスラエル人を招集して、勇敢にアモン人に対して戦ったのです。

ナハシュとダビデが友好であったのは、おそらくサウルから逃亡生活をダビデがしている時に、

ダビデに集まってくる者たちが増えてきて、ダビデにも力が与えられていた時に、互いに戦わないという盟約か何かを結んでいたのだらうと思われます。サウルはナハシュに敵対していたけれども、ナハシュはダビデには手を出しませんでした。その真実をダビデは話しているのだと思います。

サムエル記第二 9 章では、ダビデがヨナタンの息子メフィボシェテに恵みを施しているところを読みました。ダビデは、このこともヨナタンが自分に真実を尽くし、また契約を結んでいたので平和の手をメフィボシェテに差し伸べました。同じように、ダビデはアモン人の王にも真実を尽くしたいと思いました。

10:2bそこで、ダビデは家来を派遣して、彼の父の悔やみを言わせた。ダビデの家来たちがアモン人の地に来たとき、10:3 アモン人のつかさたちは、彼らの主君ハヌンに言った。「ダビデがあなたのもとに悔やみの使者をよこしたからといって、彼が父君を敬っているとお考えですか。この町を調べ、探り、くつがえすために、ダビデはあなたのところに家来をよこしたではありませんか。」10:4 そこでハヌンはダビデの家来たちを捕え、彼らのひげを半分そり落とし、その衣を半分に切って尻のあたりまでにし、彼らを送り返した。10:5 ダビデにこのことが知らされたので、彼は彼らを迎えに人をやった。この人たちが非常に恥じていたからである。王は言った。「あなたがたのひげが伸びるまで、エリコにとどまり、それから帰りなさい。」

アモンのつかさたちは、ダビデの意図を疑いました。当時、ひげは男のシンボルでありましたが、それを剃り落とすということは、去勢されられた程の精神的屈辱を与えたことに他なりません。そこでダビデは無理やり彼らをエルサレムに戻らせることをせず、ヨルダン川を渡ったところにあるエリコに留まっていなさい、と勧めます。

興味深いことに、サムエル記第二 17 章には、ナハシュの別の子であるシヨビという人がダビデのところに来て、ダビデに良くしています。ダビデがその子アブシャロムから逃げて、エルサレムを離れていたときに、シヨビは寝台と食糧をダビデの一行のために用意しました(17:27-29)。彼はダビデの真実を知っていました。ついでに話しますと、その箇所には、寝台と食糧をダビデのところに持ってきた人たちの中で、メフィボシェテが以前住んでいた家のマキルの名も出てきます。マキルも、メフィボシェテに対してダビデが示した憐れみを見て、ダビデに忠誠を尽くそうと思ったのでしょう。このように恵みを恵みであるとして知って、感謝して受け取ることができるのです。それを拒んだのが、ハヌンの周りにいるつかさたちとハヌン本人です。

これは、神の恵みに対する二つの反応を表しています。キリストの福音は、キリストが全てのものの主であられ、自分にとっても主であることを教えます。そのキリストが、自分に恵みを施し、真実を尽くしてください。けれども、キリストの支配に対して抵抗し、自分の領域を脅かされたくないと思う人は、その恵みさえも疑わしいものとして退けてしまうのです。恵みを恵みとして受け入れる人には、確かな平和があります。

## 2B アラムからの援軍 6-14

10:6 アモン人は、自分たちがダビデに憎まれるようになったのを見て取った。そこでアモン人は使いをやって、ペテ・レホブのアラムとツォバのアラムの歩兵二万、マアカの王の兵士一千、トブの兵士一万二千を雇った。10:7 ダビデはこれを聞き、ヨアブと勇士たちの全軍を送った。10:8 アモン人は出て、門の入口に戦いの備えをした。ツォバとレホブのアラムおよびトブとマアカの人たちは、別に野にいた。

8章において、打ち負かされたアラム人が懲りずに再びダビデに戦いに出てきます。アモン人の王が彼らを雇い、傭兵としました。ダビデがアラムを従属させていたのですが、彼らが反逆してきたのです。

10:9 ヨアブは、彼の前とうしろに戦いの前面があるのを見て、イスラエルの精鋭全員からさらに兵を選び、アラムに立ち向かう陣ぞなえをし、10:10 民の残りの者は彼の兄弟アブシャイの手に託して、アモン人に立ち向かう陣ぞなえをした。10:11 ヨアブは言った。「もし、アラムが私より強ければ、おまえが私を救ってくれ。もし、アモン人がおまえより強かったら、私がおまえを救いに行こう。10:12 強くあれ。われわれの民のため、われわれの神の町々のために全力を尽くそう。主はみこころにかなうことをされる。」10:13 ヨアブと彼の部下の兵士たちがアラムと戦おうとして近づいたとき、アラムは彼の前から逃げた。10:14 アモン人はアラムが逃げるのを見て、アビシャイの前から逃げて、町にはいり込んだ。そこでヨアブはアモン人を打つのをやめて、エルサレムに帰った。

ヨアブ率いるイスラエル軍は、アモン人とアラム人の軍勢に挟まれてしまっていました。それで兵士らを二つに分けて、敵の両面作戦に対応したのです。ヨアブには、「主がみこころにかなうことをされる」という信仰がありました。それで主が彼らに決定的な勝利を与えてくださいました。アモン人は自分たちの城壁のある町に逃げ込んだので軍を撤退させました。

## 3B アラムの屈服 15-19

10:15 アラムは、自分たちがイスラエルに打ち負かされたのを見て団結した。10:16 ハダデエゼルは使いを送り、川向こうのアラムを連れ出したので、彼らはヘラムに来た。ハダデエゼルの将軍ショバクが彼らを率いていた。10:17 このことがダビデに報告された。すると、彼は全イスラエルを集結し、ヨルダン川を渡って、ヘラムへ行った。アラムはダビデに立ち向かう陣ぞなえをして、彼と戦った。10:18 アラムがイスラエルの前から逃げたので、ダビデはアラムの戦車兵七百と騎兵四万をほふり、将軍ショバクを打って、その場で殺した。

ユーフラテス川流域にまで広がるシリアのそれぞれの王が団結します。そして8章で戦いを挑んだハダデエゼルが、懲りずにイスラエルに再び歯向かってきました。けれども、ダビデは打ち負かします。18節にある「ほふる」という言葉が強烈です。動物のいけにえに対して使う言葉ですが、主の前に対して捧げる行為として彼らを打ち殺した、ということです。

10:19 ハダデエゼルに仕えていた王たちはみな、自分たちがイスラエルに打ち負かされたのを見て、イスラエルと和を講じ、彼らのしもべとなった。アラムは恐れて、それからはもう、アモン人を救おうとはしなかった。

これでしつこかったアラムの王たちも、イスラエルに従属することになりました。残りはアモン人です。彼らは自分たちの町の中で籠城していました。

## **2A 罪の増幅 11**

そこで 11 章に入ります。アモン人との戦いから、ダビデが罪を犯す話が始まります。

### **1B 欲望 1-5**

11:1 年が改まり、王たちが出陣するころ、ダビデは、ヨアブと自分の家来たちとイスラエルの全軍とを戦いに出した。彼らはアモン人を滅ぼし、ラバを包囲した。しかしダビデはエルサレムにとどまっていた。

昔の戦は近代戦と異なります。きちんと休憩の時がありました。その地域は 11 月以降、冬に入りますが、それは雨が降る時期が来た、ということです。雨が降れば、地面がぬかるので戦いどころではなくなるからです。そして三月に後の雨とも呼ばれる雨が降り、それが終わる頃、戦いを再開します。そして彼らは、アモン人の都であるラバを包囲します。

ところが、ダビデは「エルサレムにとどまって」いました。ここが彼のつまずきの第一歩となりました。私たちはこれまで、主がダビデを祝福され、ダビデが大いなる者になった話を見てきました。けれども、その高みに達した時にこそ、神の恵みと愛の中からすべり落ちてしまいます。パウロは、弱い時にこそ強い、という言葉を残しましたが、それは自分の弱さにキリストの恵みが完全に働くからです。私たちが気を付けなければいけないのは、主が自分を祝福し、大いに用いられた時であります。

ある人は、「戦いは、戦いに勝利した時から始まる」と言いました。戦いと言え、ヨシュア記を思い出しますが、エリコを陥落させてから、次にアイを攻め取ろうとしたら敗走してしまいました。そこも同じです、主が与えられた御業の中で、アカンという男がエリコの金銀を貪ってそれを盗ってしまったのです。

11:2 ある夕暮れ時、ダビデは床から起き上がり、王宮の屋上を歩いていると、ひとりの女が、からだを洗っているのが屋上から見えた。その女は非常に美しかった。

ダビデが「夕暮れ」に床から起き上がっています。イスラエルの地や世界の多くの地では、昼寝をします。仕事は夕方から始まる場所が多いです。春と言えども、東からの熱風が吹く時にはエルサレムも暑くなります。ダビデも昼寝をしていたのですが、夕暮れまで寝ていたのです。ここでま

すまず、彼は靈的に脆いところにいました。

「王宮の屋上を歩いている」とありますが、中東の家屋は屋上が生活のいろいろな活動の場所となります。平らになっているので、ダビデもちょっと暑苦しかった中で屋上に上がったのでしょう。

そしてちょうど同じようにして屋上で活動していた女がいたわけです。彼女が体を洗っています。具体的には月のもの、生理によって汚れていたのを洗っていました。レビ記によれば、女の出血は出産の時、また月経の時は不浄になることを教えています。月のものは七日後に血が止まったのを確認して、水浴びをします。ここの彼女の行動を、注釈書の多くが「彼女は王を誘惑していた」と書いていました。私はそうは思えません。けれども、人から見られないように気をつけるべきであることは確かです。女の人知らなければいけないのは、男の人が女の一人よりもはるかに、目から見えてくるものでつまづくことです。したがって自分の不用意で、相手をつまづかせることがないように気を付ける必要があるでしょう。

11:3 ダビデは人をやって、その女について調べたところ、「あれはヘテ人ウリヤの妻で、エリアムの娘バテ・シェバではありませんか。」との報告を受けた。11:4 ダビデは使いの者をやって、その女を召し入れた。女が彼のところに来たので、彼はその女と寝た。..その女は月のものの汚れをきよめていた。..それから女は自分の家へ帰った。

ダビデは、「ヘテ人ウリヤの妻」という言葉、そして「エリアムの娘バテ・シェバ」という言葉を聞いた時点で、すぐに身を引くべきでした。もちろん未婚の処女を、めとることをせずに犯すことはあってはなりません。けれども、他人の妻はモーセの律法が禁ずる姦淫の罪です。しかもウリヤは、ダビデのところにいる三十人の勇士の一人であり、自分の忠実な部下であります(23:34)。さらに、バテ・シェバは、「エリアム」の娘です。エリアムも三十人の勇士の一人でありましたが、エリアムの父は「アヒトフェル」です(23:34)。アヒトフェルはダビデを支えるすぐれた議官であり、ダビデの友人でもありました。したがって、どちらも自分に近い、自分に忠実な、信頼できる者たちの女であったのです。

ですから、ダビデは手を出してはいけませんでした。これまでの彼の人生は、「手を下さない」というものでした。サウルに手を下さない、分捕り物は分かち合う、自分に真実を尽くしてくれたものに真実を尽くすなど、すべてのことは主から来ているという信仰によって支えられていました。だから、彼は身を引くべきだったのです。ところが、目の欲、肉の欲、さらに暮らし向きの自慢という、第一ヨハネに書かれている三つの欲に引かれて、この罪を犯してしまったのです。「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。(1ヨハネ 2:16)」

11:5 女はみごもったので、ダビデに人をやって、告げて言った。「私はみごもりました。」

ダビデは、このくらいの罪は隠せると思ったのでしょう。ウリヤは戦場にいます。けれども、そうできませんでした。「私はみごもりました」というバテ・シェバからの知らせを受けます。それもそのはず、月のものを洗っていたのですから一番妊娠しやすい時期です。一度、自分の欲に任せると、自分が何をしているのか分からなくなります。

## 2B 隠蔽の試み 6-13

11:6 ダビデはヨアブのところに人をやって、「ヘテ人ウリヤを私のところに送れ。」と言わせた。それでヨアブはウリヤをダビデのところに送った。11:7 ウリヤが彼のところには行って来ると、ダビデは、ヨアブは無事であるか、兵士たちも変わりないか、戦いもうまくいっているか、と尋ねた。11:8 それからダビデはウリヤに言った。「家に帰って、あなたの足を洗いなさい。」ウリヤが王宮から出て行くと、王からの贈り物が彼のあとに続いた。

ダビデは、自分の罪を覆い隠そうとしています。ウリヤが今、自分の妻と寝れば、生まれてくる子はウリヤの子ということになるだろうという憶測です。

11:9 しかしウリヤは、王宮の門のあたりで、自分の主君の家来たちみなといっしょに眠り、自分の家には帰らなかった。11:10 ダビデは、ウリヤが自分の家には帰らなかった、という知らせを聞いて、ウリヤに言った。「あなたは遠征して来たのではないか。なぜ、自分の家に帰らなかったのか。」11:11 ウリヤはダビデに言った。「神の箱も、イスラエルも、ユダも仮庵に住み、私の主人ヨアブも、私の主人の家来たちも戦場で野営しています。それなのに、私だけが家に帰り、飲み食いして、妻と寝ることができましようか。あなたの前に、あなたのたましいの前に誓います。私は決してそのようなことをいたしません。」

ウリヤは、ダビデにつく勇士らしく、霊的にも、また兵士としても優れた人物です。自分がヘテ人という異邦人であるにも関わらず、神の箱とイスラエル人に敬意を払う敬虔な者でした。自分がしている務めは神の箱の前で行なっていることだ、またイスラエルの一般民に仕えるために行なっている、ということです。そして主人であるヨアブに仕えていることだ、ということです。そして共に戦っている仲間に申し訳ないという思いがあります。これは皮肉ですが、このようにダビデ自身が自分の兵士たちにこれまで教育し、訓練していたのです。ダビデが墮落してしまったので、ウリヤが際立って霊的に見えます。

11:12 ダビデはウリヤに言った。「では、きょうもここにとどまるがよい。あすになったらあなたを送り出そう。」それでウリヤはその日と翌日エルサレムにとどまることになった。11:13 ダビデは彼を招いて、自分の前で食べたり飲んだりさせ、彼を酔わせた。夕方、ウリヤは出て行って、自分の主君の家来たちといっしょに自分の寝床で寝た。そして自分の家には行かなかった。

二回目の試みも駄目でした。そこで彼は、やってはならないことをやります。

### 3B 隠れた殺人 14-25

11:14 朝になって、ダビデはヨアブに手紙を書き、ウリヤに持たせた。11:15 その手紙にはこう書かれてあった。「ウリヤを激戦の真正面に出し、彼を残してあなたがたは退き、彼が打たれて死ぬようにせよ。」

非常にむごいことをダビデはします。殺人計画を本人に持たせています。

11:16 ヨアブは町を見張っていたので、その町の力ある者たちがいると知っていた場所に、ウリヤを配置した。11:17 その町の者が出て来てヨアブと戦ったとき、民のうちダビデの家来たちが倒れ、ヘテ人ウリヤも戦死した。11:18 そこでヨアブは、使いを送って戦いの一部始終をダビデに報告するとき、11:19 使者に命じて言った。「戦いの一部始終を王に報告し終わったとき、11:20 もし王が怒りを発して、おまえに『なぜ、あなたがたはそんなに町に近づいて戦ったのか。城壁の上から彼らが射かけてくるのを知らなかったのか。11:21 エルベシェテの子アビメレクを打ち殺したのはだれであったか。ひとりの女が城壁の上からひき臼の上石を投げつけて、テベツで彼を殺したのではなかったか。なぜ、そんなに城壁に近づいたのか。』と言われたら、『あなたの家来、ヘテ人ウリヤも死にました。』と言いなさい。」

かつて学んだ士師記に、アビメレクが女の投げたひき臼によって死んだことが書かれていました。それは城壁に近づきすぎたからです。この話が戦いにおける教訓として語り継がれていました。そのことをダビデが言ってきたら、ウリヤが死んだと言いなさい、とヨアブは言いつけています。

11:22 こうして使者は出かけ、ダビデのところに来て、ヨアブの伝言をすべて伝えた。11:23 使者はダビデに言った。「敵は私たちより優勢で、私たちに向かって野に出て来ましたが、私たちは門の入口まで彼らを攻めて行きました。11:24 すると城壁の上から射手たちが、あなたの家来たちに矢を射かけ、王の家来たちが死に、あなたの家来、ヘテ人ウリヤも死にました。」11:25 ダビデは使者に言った。「あなたはヨアブにこう言わなければならない。『このことで心配するな。剣はこちらの者も、あちらの者も滅ぼすものだ。あなたは町をいっそう激しく攻撃して、それを全滅せよ。』あなたは、彼を力づけなさい。」

自分の企みが外には一切漏れない形で、ダビデはウリヤ殺害に成功しました。彼はさらに、この件をきれいに収めようとします。

### 4B 結婚による解決 26-27

11:26 ウリヤの妻は、夫ウリヤが死んだことを聞いて、夫のためにいたみ悲しんだ。11:27 喪が明けると、ダビデは人をやり、彼女を自分の家に迎え入れた。彼女は彼の妻となり、男の子を生んだ。しかし、ダビデの行なったことは主のみこころをそこなった。

バテ・シェバが喪に服して、その期間が終わったらすぐに彼女を自分の妻にしました。これは、当

時の基準からすると、尊いことです。戦死して残されたやもめを、その家臣のことを思って自分の妻にするということは、王としては慈悲のある行為です。ですから、ダビデが行なったことは罪の隠蔽だったのですが、それがかえって、一般の民の前では尊く思われたのです。

しかし、「主のみこころをそこなった」とあります。人を欺くことはできても、主にはすべてのことが裸です。「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。(ヘブル 4:13)」

### **3A 罪の暴露 12**

そしてダビデにかつて、世継ぎの子が神の国を受け継ぐという約束を告げたナタンが、今度はダビデの罪を告げに来ます。

#### **1B 自分自身を裁く者 1-6**

12:1 主がナタンをダビデのところに遣わされたので、彼はダビデのところに来て言った。「ある町にふたりの人がいました。ひとりには富んでいる人、ひとりには貧しい人でした。12:2 富んでいる人には、非常に多くの羊と牛の群れがありますが、12:3 貧しい人は、自分で買って来て育てた一頭の小さな雌の子羊のほかは、何も持っていませんでした。子羊は彼とその子どもたちといっしょに暮らし、彼と同じ食物を食べ、同じ杯から飲み、彼のふところやすみ、まるで彼の娘のようでした。12:4 あるとき、富んでいる人のところにひとりの旅人が来ました。彼は自分のところに来た旅人のために自分の羊や牛の群れから取って調理するのを惜しみ、貧しい人の雌の子羊を取り上げて、自分のところに来た人のために調理しました。」12:5 すると、ダビデは、その男に対して激しい怒りを燃やし、ナタンに言った。「主は生きておられる。そんなことをした男は死刑だ。12:6 その男は、あわれみの心もなく、そんなことをしたのだから、その雌の子羊を四倍にして償わなければならない。」

この喩えに従えば、午前中にお話ししましたように四倍の償いだけで十分です。「牛とか羊を盗み、これを殺したり、これを売ったりした場合、牛一頭を牛五頭で、羊一頭を羊四頭で償わなければならない。(出エジプト 22:1)」けれども、「死刑だ」と言ってダビデが激しく怒ったのは、自分自身が犯した姦淫と殺人の罪があったからです。私たちが平気で人を判断し、裁くことのできる理由は、実は自分自身がその罪を犯しているからに他なりません。「あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。(ローマ 2:1)」少し状況を変えてみれば、自分自身がまさにその罪を行なっています。

#### **2B 御言葉の蔑み 7-14**

12:7 ナタンはダビデに言った。「あなたがその男です。イスラエルの神、主はこう仰せられる。『わたしはあなたに油をそそいで、イスラエルの王とし、サウルの手からあなたを救い出した。12:8 さらに、あなたの主人の家を与え、あなたの主人の妻たちをあなたのふところに渡し、イスラエルとユダの家も与えた。それでも少ないというのなら、わたしはあなたにもっと多くのものを増し加えた



であろう。12:9 それなのに、どうしてあなたは主のことばをさげすみ、わたしの目の前に悪を行なったのか。あなたはヘテ人ウリヤを剣で打ち、その妻を自分の妻にした。あなたが彼をアモン人の剣で切り殺したのだ。

ナタンはダビデに対して預言者であり、友人です。「あからさまに責めるのは、ひそかに愛するのにまさる。(箴言 27:5)」ダビデと深い信頼関係があるからこそ、彼は罪をそのまま告げることができました。

ここのナタンの言葉は、極めて大切であります。ダビデの生涯において、神の恵みが彼の後をついていきました。イスラエルの王として油を注がれたのは神であられ、サウルの手からダビデを救われたのも神ご自身です。そして、サウル家をダビデに与えられました。「あなたの主人の妻たちをあなたのふところに渡し」とありますが、おそらく、ミカル以外にも、サウル家に残されていた妻やそばめの一部をダビデは受け取ったのであろうと思われる。これらも主が行なってくださいました。

そして大事なのが、「それでも少ないというのなら、わたしはあなたにもっと多くのものを増し加えたであろう。」という約束です。主は、キリストにあって全てのものを惜しみなく与えてくださる方です。ダビデが行なうことすべてに、主は豊かな恵みを施してくださいました。もし妻をもっと欲しいならば、主はご自分が由とするところまで彼に与えられた、ということです。すべては神から来るのであり、神にすべてをゆだね、明け渡していく時、神が豊かに施してくださいます。私たちはしばしば、神は自分から取り上げる、あるいは制限しておられると考えますが、いいえ、それは私たちの狭い心ではそう感じるのであって、実は豊かに備えていてくださっているのです。

けれども、これまでのダビデの生涯とは正反対のこと、すなわち、主に属する者を自分の手で奪い取っていきました。私たちが自分自身によって、自分の欲しているものを取ろうとする時に、ダビデと同じ罪を犯します。そして「主のことばをさげすみ」とありますが、これはもちろん、「姦淫してはならない」「殺してはならない」という主の言葉です。これを彼は蔑みました。

12:10 今や剣は、いつまでもあなたの家から離れない。あなたがわたしをさげすみ、ヘテ人ウリヤの妻を取り、自分の妻にしたからである。』12:11 主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。12:12 あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行なおう。』

これは、そのまま起こりました。次の章13章から、アブシャロムが兄アムノンを殺すという事件が起こります。そしてアブシャロム自身がヨアブに殺されます。そしてダビデの死後ですが、ソロモンがアドニヤを処刑します。ダビデがウリヤを殺したことが、拡大鏡のようにダビデの家の中で展開するのです。それから姦淫については、アブシャロムがダビデのそばめ十人と、ダビデが歩いてバ

テ・シェバを見た屋上で寝たのです。彼が秘かに行なったことが、このように太陽の前に明らかにされます。イエス様が弟子に言われた通りです。「おおいかぶされているもので、現わされないものではなく、隠されているもので、知られずに済むものはありません。ですから、あなたがたが暗やみで言ったことが、明るみで聞かれ、家の中でささやいたことが、屋上で言い広められます。(ルカ 12:2-3)」

神は、ご自分も望まれていませんでしたが、このような形で栄光を現されました。これまで神はダビデに恵みを施すことによって、栄光を現しました。恵みを施すことによって、イスラエルの神こそが王であり、ダビデはこの方のしもべであることを表されたのです。けれども今、ダビデが罪を犯したので、正しく裁くことによってご自分の名があがめられなければいけません。どちらにおいてもご自分の栄光を現しておられるのですが、神が神であるために、イスラエルの主権者であられるために、このことを行なわなければならなかったのです。ですから、私たち一人一人が、もし神の恵みではなく、自分のことを前面に出すのならば、神はそれなりの対応をしなければならない、という訳です。

そして、拡大鏡のようにダビデの罪が露わにされるもう一つの理由は、指導者に対する基準が厳しい、ということです。「私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。(ヤコブ 3:1)」一般の信者が犯す過ちと、指導者のそれでは、たとえそれが同じ罪であったとしても、その影響は指導者が犯すほうがはるかに大きくなります。悪魔もそれを知っています。指導者が倒れれば、神の家族全体が倒れさせることができる訳です。

12:13 ダビデはナタンに言った。「私は主に対して罪を犯した。」ナタンはダビデに言った。「主もまた、あなたの罪を見過ごしてくださった。あなたは死なない。12:14 しかし、あなたはこのことによって、主の敵に大いに侮りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。」

ダビデの罪の告白の言葉、「私は主に対して罪を犯した。」というのは、とても重く、かつ真実に満ちています。かつてサウルも罪を犯した、という言葉を行いました。けれども、その後で彼は言い訳をいい、かつ「私も礼拝できるようにしてください。」とすぐをお願いをしていました。同じように昔、エジプトでもパロが、「私は主に罪を犯した。」と言いましたが、やはりどうかこの苦しみを取ってくれ、と言ってお願いを言っています。そのため言葉数も多くなっています。けれども、ダビデは主の裁きはまことに正しいということを受け止めて、罪を告白しているのです。

思い出すのは、イエス様の十字架の横にかけられている二人の犯罪人です。二人とも救いをイエスに願い出ました。一人はこう言いました。「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え。(ルカ 23:39)」救いを要求しています。なぜなら、キリストなのだから、と。けれどももう一人の犯罪人はこう言いました。「『おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いこと

は何もしなかったのだ。』そして言った。『イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。』(40-42 節)」分かりますか、彼は自分の刑罰を甘んじて受けているのです。これは当然の報いであると、裁きを受け入れているのです。そして、神の憐れみを請いて、「私を思い出してください。」とお願いしています。これが、自分が罪人であることを認めていることです。裁きから救われるようにせよ、と要求することは、まだ自分の罪の重さが分かっていない証拠です。

ダビデの罪の告白の詳しい部分は、有名な詩篇 51 篇にあります。読んでみましょう。

51 指揮者のために。ダビデの賛歌。ダビデがバテ・シェバのもとに通ったのちに、預言者ナタンが彼のもとに来たとき

1 神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。2 どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。3 まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。

これが、今話したことです。自分の前に罪がある、そしてそれを神が宣告される時に、それは正しく、きよいと告白しています。

51:5 ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。6 ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。7 ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。8 私に、楽しみと喜びを、聞かせてください。そうすれば、あなたがお砕きになった骨が、喜ぶことでしょう。9 御顔を私の罪から隠し、私の咎をことごとく、ぬぐい去ってください。

ダビデは、バテ・シェバとの罪のことで、自分の罪の性質について悟りました。それは、母の胎から自分は罪ある者として生まれた、ということです。自分自身の内にある罪は、自分が外側の行為によって初めて生まれたのではなく、もともと自分の性質だったのだ、ということです。この内在している罪をも、主がことごとく取り除くことができるという信仰を持っています。

51:10 神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。11 私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。12 あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。13 私は、そむく者たちに、あなたの道を教えましょう。そうすれば、罪人は、あなたのもとに帰りましょう。

ダビデが罪を犯して失われたものは、救いではありませんでした。救いの喜びでした。神は、ダビデから恵みを取り去ることは決してないと約束されていました。けれども、彼は「あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。」と祈っています。聖霊の実である喜びが罪を犯した後で失われてしまったからです。私たちが罪を犯すと失うのは救いではありません。救いの中にある神との交わりが失われます。救いの保証と、そこから湧き上がる喜びが失われます。

51:14 神よ。私の救いの神よ。血の罪から私を救い出してください。そうすれば、私の舌は、あなたの義を、高らかに歌うでしょう。15 主よ。私のくちびるを開いてください。そうすれば、私の口は、あなたの誉れを告げるでしょう。16 たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。17 神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

なんと大事な言葉でしょうか？サウルは、罪を犯した後はいけにえを捧げさせてください、と言いましたが、そこには悔い改めの心はありませんでした。ダビデはしっかりと、主の前に立ち、自分の心を砕いたのです。これこそが神へのいけにえにふさわしいものだ、ということです。

### 3B 喪に服すダビデ 15-25

12:15 こうしてナタンは自分の家へ戻った。主は、ウリヤの妻がダビデに産んだ子を打たれたので、その子は病気になった。12:16 ダビデはその子のために神に願い求め、断食をして、引きこもり、一晩中、地に伏していた。12:17 彼の家の長老たちは彼のそばに立って、彼を地から起こそうとしたが、ダビデは起きようともせず、彼らといっしょに食事を取ろうとしなかった。12:18 七日目に子どもは死んだが、ダビデの家来たちは、その子が死んだことをダビデに告げるのを恐れた。「王はあの子が活着ている時、われわれが話しても、言うことを聞かなかった。どうしてあの子が死んだことを王に言えようか。王は何か悪い事をされるかもしれない。」と彼らが思ったからである。12:19 しかしダビデは、家来たちがひそひそ話し合っているのを見て、子どもが死んだことを悟った。それでダビデは家来たちに言った。「子どもは死んだのか。」彼らは言った。「なくなりました。」12:20 するとダビデは地から起き上がり、からだを洗って身に油を塗り、着物を着替えて、主の宮にはいり、礼拝をしてから、自分の家へ帰った。そして食事の用意をさせて、食事をとった。12:21 すると家来たちが彼に言った。「あなたのなさったこのことは、いったいどういうことですか。お子さまが生きておられる時は断食をして泣かれたのに、お子さまがなくなれると、起き上がり、食事をなさるとは。」12:22 ダビデは言った。「子どもがまだ活着ている時に私が断食をして泣いたのは、もしかすると、主が私をあわれみ、子どもが生きるかもしれない、と思ったからだ。12:23 しかし今、子どもは死んでしまった。私はなぜ、断食をしなければならないのか。あの子をもう一度、呼び戻せるであろうか。私はあの子のところに行くだろうが、あの子は私のところに戻っては来ない。」

ここに、元のダビデに立ち戻っている姿を見ます。ダビデは、主の慈しみをよく知っていました。もしかしたら、主が宣言されたこの子の死についても、その憐れみによって思い直してくださるかも

れないという可能性をもって、主の前に願い出ていました。覚えていますか、ヨナ書において、ヨナがニネベに対して四十日後にこの町が滅ぼされると宣言しましたが、王を始めとするニネベの人たちが悔い改めて、何とかして悪から立ち返ろうとしている姿を見て、主はその裁きの御手を引かれました。主は憐れむことに早い方なのです。

けれども、その子が死んだということを聞いた時には、ダビデは一切を主にお委ねしたのです。その主の御心、またその裁きを受け入れました。それは主に慈しみがなくなった、ということではなく、むしろ主の慈しみを信じて、その裁きをも甘んじて受け入れたのです。主の敵を侮らせたのであるから、主の名が清く保たれるためには、この子が死ななければその名の聖いことが伝われない、という御心だったのですから、彼はそれを受け入れたのです。

そしてもう一つ、「この子をもう一度、呼び戻せるであろうか。」と語っています。これは大事な教えであります。終わりの日に起こる復活を除いては、死者は呼び戻すことはできません。「ちりはもとあった地に帰り、霊はこれを下さった神に帰る。(伝道者 12:7)」とソロモンは言いました。旧約時代はすべての死者が陰府に下りますが、そこは神の領域です。神の領域の中に入った霊は、この地上に行ったり来たりすることはない、ということです。

これが、私たちは人の死に面する時に憶えておかなければいけない真理です。日本の宗教では、その反対のことを行ないます。死者への弔いによって、死んだ人が自分たちといっしょにいることを望むのです。死んだ後も実は自分とその霊がいると信じさせるのです。悪霊が死者に変わって出てくることはあり得ても、この地に死者の霊が留まることはありません。むしろ、人の命の創造者、人の命を取ることもできる主権者を、死者の前ではあがめて、厳粛な時を過ごすべきです。

12:24 ダビデは妻バテ・シェバを慰め、彼女のところにはいり、彼女と寝た。彼女が男の子を産んだとき、彼はその名をソロモンと名づけた。主はその子を愛されたので、12:25 預言者ナタンを遣わして、主のために、その名をエディデヤと名づけさせた。

ソロモンという名には「平和(シャローム)」という意味があります。さらに、ナタンが彼に、「主に愛された」という意味のエディデヤという名を付けています。なんという慰めと恵みでしょうか！ここに、神の懲らしめと恵みのバランスがあります。私たちは裁きと聞くと、それは恵みと相いれないと思うかもしれませんが、いいえ、神は懲らしめを行なわれますが、それが恵みを引き離すことはありません。この子がダビデの後継者となり、ダビデの国を平和と豊かさに満ちた大国へとしていくのです。そしてもちろん、マタイ 1 章のイエス・キリストの系図の中にソロモンの名があり、またバテ・シェバの名があるのです。イエス様の系図には、女が四人書き記されていて、タマル、ラハブ、ルツ、そしてウリヤの妻バテ・シェバが出てきます。通常は男性しかいない系図の中にあえて女性の名を書き記し、そしてなおかつ、曰くつき、あるいは異邦人の女性を選んでいきます。ここに恵みがあるのです。「律法がはいて来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。(ローマ 5:20)」

#### 4B アモンの屈服 26-31

12:26 さて、ヨアブはアモン人のラバと戦い、この王の町を攻め取った。

ダビデの罪についての話を終えて、ようやくアモン人との戦いの続きを話すことができました。

12:27 ヨアブはダビデに使者を送って言った。「私はラバと戦って、水の町を攻め取りました。

12:28 しかし今、民の残りの者たちを集めて、この町に対して陣を敷き、あなたがこれを攻め取ってください。私がこの町を取り、この町に私の名がつけられるといけませんから。」12:29 そこでダビデは民のすべてを集めて、ラバに進んで行き、これと戦って、攻め取った。

ラバの陥落は、「水の町」すなわち水の供給を絶つことによって成功しました。これが町を包囲する時に決定打になります。後にヒゼキヤは、エルサレムの町の中に水を取り入れるため、アッシリヤが包囲する前に、ギホンの泉から水道を作り、それはシロアムの池まで続いています。

12:30 彼は彼らの王の冠をその頭から取った。その重さは金一タラントで、宝石がはめ込まれていた。その冠はダビデの頭に置かれた。彼はまた、その町から非常に多くの分捕り物を持ってきた。12:31 彼はその町の人々を連れてきて、石のこぎりや、鉄のつるはし、鉄の斧を使う仕事につかせ、れんが作りの仕事をさせた。ダビデはアモン人のすべての町々に対して、このようにした。こうして、ダビデと民のすべてはエルサレムに帰った。

当時の王たちは、このように大きな王冠を勝利者に付与されます。その神々が王に勝利を与えたことを象徴するものです。ここではもちろん主ご自身がダビデに征服者としての光栄を与えておられます。そして、これでアモン人が自分たちに屈服したので、ようやく周囲の国々をほぼすべて平定することができました。

今回は、家から剣が離れないとナタンが宣言した、その実現を見ていきます。読むのは辛いことですが、けれどもその中でも神の憐れみがあることに気づいていきたいと思えます。主はいつも怒っておられません。恵みをもって報いてくださいます。罪を犯したことによる悲しみはありますが、その悲しみを主にあって堪えるときに、主は私たちの魂を清めてくださり、平和と義の実を結ぶことができるようにしてくださいます。悔い改めの時間を持ちましょう。